

牧師室から (2022.7.17)

この頃雨が続く。しばらく前であるが、教会でピアノを弾いていたら、妻が、雨の日は会堂でピアノの音が良く響くという。実は私も以前からそのように感じていた。月曜から父の介護のために私一人で千葉の実家に滞在しているが、昨日(14日)も雨であった。2階でピアノを弾いていると、後で一階にいた母が、やはり雨の日はピアノが良く鳴るという。

なぜかと考えてみたが、ピアノには木製の響板があって、それに弦の振動音が共鳴するのだが、木は湿気が多いと膨張して反りが強くなるものである。また気温も少し下がるであろうから、晴れで乾燥しているときよりは、ピッチも少し上がることであろう。そのようなことかなと思い巡らせた。

ショパンの前奏曲集に「雨だれ」との異名をつけられた作品がある。これは彼がジョルジュ・サンドと地中海のマジョルカ島の修道院に療養のため滞在した時に作られた小品である。連日雨が続く中でそこから発想を得たともいわれているが、確かに最初から最後まで続く同音の連打は雨だれを連想させる。この曲はいわゆるABA形式をとっているが、中間部のバスや連打音の響きは、雨の降り注ぐ修道院でよく響いたのではないかと思った。

私はかつてより一度マヨルカ島に行ってみたいと思っている。青い空と海と白亜の建物の美しさを直にこの目で見たいし、彼らの足跡を訪ねてみたいのである。

(鈴木淳一牧師)